

納豆用大豆「コスズ」の安定多収栽培法

(農試技術部)

1 背景とねらい

昭和62年度県の準奨励品種に採用された納豆用大豆「コスズ」は、全農の銘柄産地指定を受けており、実需者からも安定供給に対する強い要望がある。本品種については、粒を小さく抑えることに重点をおく栽培法として、昭和63年度に「極小粒大豆『コスズ』の安定多収技術」を普及に移したところである。しかし、産地では極小粒規格としては粒が大きいことや普通大豆より収量が低いことが問題となっている。

そこで作況調査、産地調査および栽培法試験などから「コスズ」の収量や粒の大きさについて再検討し、新たに高収益をめざし安定多収をはかる栽培技術を組み立てたので指導上の参考に供する。

2 技術内容

(1) 収量及び粒の大きさの変動

- 1) 栽培法との関係：早播は晩播より極小粒規格の割合は低いが、小粒規格も含めた全体の収量が安定しており、規格間の価格差を考慮しても収益性で優る。
- 2) 地帯別特徴：県南部では百粒重が大きく多収事例が多い。県中北部では県南部より収量が低く百粒重が小さい傾向にある。

(2) 目標収量（表1）

県内一律の収量目標を見直し、表1のとおり地帯別に目標収量を設定した。

(3) 栽培法（表1）

- 1) 播種適期：安定多収により収益性の向上をはかるためには、従来の指導よりやや早い表1の期間が播種適期となる。
- 2) 栽植様式：十分な生育量の確保と極端な蔓化・倒伏の回避という両面から、表1の栽植本数とするのが適当である。

(4) 期待生育量（表2）

本栽培法によって期待される生育量と粒の大きさの目安は表2のとおりである。

表1 地帯別目標収量・栽培法

地帯	目標収量	播種適期	栽植本数
県北部	210kg/10a	5月20日～5月25日	15,000本/10a前後
県中部	240kg/10a	5月20日～5月30日	”
県南部	300kg/10a	5月30日～6月15日	12,000本/10a前後

表2 地帯別期待生育量

項目	県北部	県中部	県南部
主 茎 長 (cm)	80~100	85~105	90~110
分 枝 数 (本)	5~7	6~8	6~8
総 節 数 (節 / m ²)	700~900	800~1000	900~1100
稔 実 莢 数 (莢 / m ²)	1000~1500	1200~1700	1500~2000
百 粒 重 (g)	9.5~10.5	10.0~11.0	10.0~11.5
粒径4.9~5.5mm* (%)	60~40	50~30	50~25

* 極小粒規格の主体となる粒径4.9~5.5mmの収量が全収量に占める割合

3 指導上の留意事項

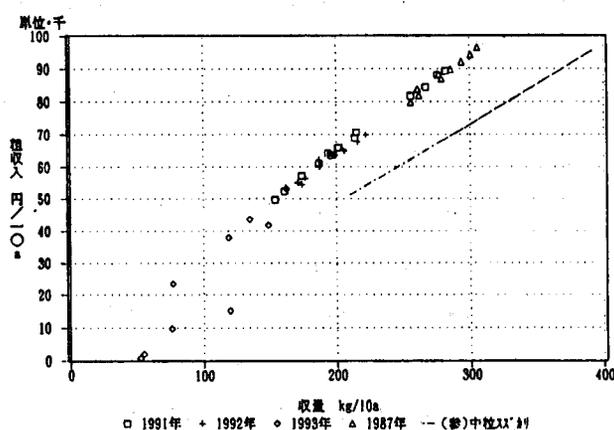
施肥量、培土の方法等は、昭和63年度指導上の参考事項「極小粒大豆『コスズ』の安定多収技術」に準ずる。

4 試験成績概要

表3 播種期と収量・百粒重・規格

試験年次	播種期 (月・日)	収量 (kg/10a)	百粒重 (g)	規格	
				極小粒 規格収量 (kg/10a)	小粒 規格収量 (kg/10a)
1991年 「多収年」	5・20	276	10.5	132.8	142.4
	6・5	194	9.4	161.2	32.0
1992年 「平常年」	5・21	206	9.9	71.6	133.9
	6・5	187	8.4	163.1	23.3
1993年 「低収年」	5・20	163	7.3	148.6	9.5
	6・4	120	5.9	44.6	0.5

栽培法試験 栽植密度：14,286本/10a



栽培法試験 1987、1991~1993年

図1 規格間価格差を考慮した粗収入と全収量の関係

解説)

表3の規格別収量は、粗収入が最大となるようにふるい分けた場合のものである。多収年には、晩播による小粒規格部分の収量低下が大きい。平常年では晩播により極小粒規格収量が増加するが、収益面の有利性は全収量の低下で相殺される。遅延型冷害の年における晩播では、未熟粒が増加する。図1は、表3と同様にふるい分けた場合について、平成4年度1等の価格をもとに試算した粗収入と全収量の関係である。この図から、極小粒と小粒規格間の価格差を考慮しても、粗収入と収量はほぼ比例していることが分かる。